

第7回観測天文学ソフトウェア 開発シンポジウム 報告

表記研究会が、1997年11月25～27日に国立天文台（三鷹）で開催されました。この研究会は観測天文学におけるソフトウェアの開発成果発表や情報交換・意見交換を目的に天文情報処理研究会が主催して毎年行なわれているものです。

今回は「データベース天文学」をテーマに

- ◆ 世界のデータアーカイブ／データベースの現状
- ◆ 日本のデータアーカイブ／データベースの現状
- ◆ 今後の計画
- ◆ HST データアーカイブを用いた天文学
- ◆ その他のアーカイブデータ／データベースを用いた天文学

の5部構成で開催されました。懐の貧しさのため天文学データ解析計算センターユーザーズミーティングに便乗しての開催となり、変則的なスケジュールになりましたが、大勢（48名）の参加者を迎え盛会でした。

今回の研究会で印象的であったのは次の2点です。1つは、実際にデータアーカイブを用いて論文になるレベルの天文学研究を進めておられる方が増えたことです。今までこの種の研究会では、どこにどんなデータベースがあるかという紹介やその使用方法の紹介が主で、実際にデータアーカイブやデータベースを用いて天文学の研究をした例は殆んどありませんでした。今回の講演のような論文になるレベルだけでなく、自分の研究にちょっと役立てようというレベルでは、かなり多くの方が利用されているでしょう。最近ではいろいろな波長で天体を調べることに関心をお持ちの方が増えてお

り、データアーカイブを用いるという機会がますます増えてきているようです。

もう1つは、日本でのデータアーカイブシステムの開発が画期的に進んできている点です。光学天文学では岡山や木曾のデータを検索するMOKAというシステムが運用されており、X線天文学ではDARTSが運用されています。また、電波天文学でも野辺山でシステムの構築が進められています。MOKAやDARTSは利用者の要求をよく考慮してあるシステムであるとの評価を受けており、世界的にも第1線の仕事になりつつあると言えます。

さて、将来に目をむけると、光赤外ではすばる望遠鏡が間もなく動きだし、X線ではAstro-E、赤外線ではAstro-Fの打ち上げが近付いています。これらのデータアーカイブをどうするかは非常に重要な問題でしょう。日本はデータアーカイブで遅れをとっていると言われつつも上に述べた利用者／開発者両面の進展は大きく、これら大型装置のデータアーカイブに現在の経験が活かされていくものと期待されます。様々な波長のデータをつきあわせて天体のより総合的な理解を得ようとする傾向は今後ますます強くなっていくものと思われ、データベース／データアーカイブはさらに重要な存在になっていくでしょう。そうした認識を深める意味でもこの研究会の意義は大きかったと言えるでしょう。

この文章が皆様のお目に止まる頃にはこの研究会の集録は完成しているはずですが、集録の請求は天文情報処理研究会事務局 (jaipa@r1.mtk.nao.ac.jp) までお願いいたします。

市川伸一（国立天文台）、太田耕司（京都大学）